

町内会の活性化と交流の輪を広げる

2年4組11番 小林愛来

アブストラクト

町内会には高齢者が多く、若い世代が少ない。また、その高齢者と若い世代が関わる機会も少ないため、町内会は徐々に衰退している。

そこで、私たちは町内会と若い世代の交流の架け橋になることで、町内会の活性化を図る。

はじめに

きっかけは、町内会の高齢者の方たちが若い世代が居ないことで困っていることがあると知ったため。

問い

- ①高齢者が若い世代に望むことは何か。
- ②若い世代に町内会の活動を知ってもらうにはどうしたら良いか。

仮説

- ①まず近くに若い世代がいないため、関わりを持ってもらうことを望んでいるのでは無いかな？

↑力仕事などの手伝いや話し相手など。

- ②町内会と合同でイベントを企画することで、若い世代にも町内会に興味をもって貰えるのでは？

1 町内会の茶話会に実際に行ってみて

町内会で定期的に行われている茶話会に参加した。

高齢者のもとに行くと、函館大火の話など自分たちの知らない時代の話をしてくれた。

話をしてくれた人たちの中には、若い世代に話を聞いて貰えることが嬉しいと、来てくれたことに喜ぶ人が多くいた。

その話の中で要望として、雪かきに来て欲しい、買い物の手伝いに来て欲しいという声もあった。

また、各地の町内会の現状として、入会率が年々減っている結果もでている。

そして、北海道では函館市が入会率ワースト6位という結果になっている。

2 結果

高齢者は若い世代との関わりを求めており、話を聞いて貰うだけでも嬉しいと言っていた。また、手伝って欲しいことには、雪かきや買い物の付き添いなども挙げられていた。

高齢者の話を聞いていると、若い子に話を聞いてもらえて嬉しいという声が多くあがった。

3 考察

周りに若い世代が居ないため、話し相手になってくれる人がいない。話し相手がいないと話す機会も失われ、認知症なども進行していく可能性が高くなる。

昔の話をすることで認知症進行の予防になるという『回想法』というアプローチがある。

回想法とは、昔の懐かしい写真や音楽、昔使っていた馴染み深い家庭用品などを見たり、触れたりしながら、昔の経験や思い出を語り合う一種の心理療法です。1960年代にアメリカの精神科医、ロバート・バトラー氏が提唱し、認知症の方へのアプローチとして注目されています。

認知症の方は、最近の記憶を保つことは困難ですが、昔の記憶は保持されています。昔のことを思い出して言葉にしたり、相手の話を聞いて刺激を受けたりすることで脳が活性化し、活動性・自発性・集中力の向上や自発語の増加が促され、認知症の進行の予防となります。また、昔の思い出に浸り、お互いに語り合う時間を持つことで精神的な安定がもたらされるなどの効果があります。

回想法には、マンツーマンで行う個人回想法と10名前後で行うグループ回想法とがあります。

グループ回想法は、グループ活動に参加可能な対象者10名前後のグループを作り、スタッフ2名（リーダー、サブリーダー）を立てます。1クール8～10回とし、事前に対象者の個人情報や生活歴などを調査して、対象者の触れられたくない話題は避けるようにします。「子供時代の遊び」や「旅の思い出」などの気軽に話せるテーマを決定し、1時間ほど実施します。

個人回想法では、何気ない日常会話からスタートして自由に話をする方法と、あらかじめ決めたテーマについて1対1の面談という形で話をする方法とがあります。

回想法を実施するには、知識・技術の習得が必要なので、探究活動の中で実施することは難しいかもしれませんが、話し相手になったり昔の思い出話をするなどの近い行為はできると思うので、コミュニケーションの一環としてするには比較的やりやすいのではないかと考えました。

②若い世代との交流をもってもらうには

昔の手遊び体験教室などを開催することで、高校生以外の若い世代とも関わりを持てるのではないかと。そしてその保護者の方にも関わってもらうことで町内会の活動を知ってもらう良い機会になるのではないかと。

4 まとめと結論

昔の話や、手遊びなどを一緒に行うことで、若い世代とのコミュニケーションの場にもなり、外に出て遊ぶことが少なくなっている若い世代において、いい経験にもなるのではと考えた。

また、高齢者にとっても、脳の活性化にもつながり、若い世代とのコミュニケーションによって生きる楽しみにもなるのではと考えた。

一人暮らしの高齢者が増えている現代において、孤独死を防ぐ側面もあると考える。

西高生にとってのメリットとしては、町内会と仲良くなることで、文化祭などで協力を得やすくなり、後夜祭で花火などができるかもしれないなど文化祭の規模を拡大できるなどがある。

5 課題

若い世代に町内会に興味を持ってもらうことで、町内会に入るきっかけを作っていく。

また、町内会の方から上がっている要望に答えるにはどうしたら良いか。

6 謝辞。探究でお世話になった人たちへのお礼を述べる。

この探求を引き継がせて頂いた先輩方、そして引き継ぎの機会をくださった長澤先生、調査や活動に協力して下さった町内会の方々、ありがとうございました。

7 参考文献

1)健康長寿ネット 回想法

<https://www.tyojyu.or.jp/net/byouki/ninchishou/kaisou.html#>

2)読売新聞オンライン 北海道の入会率

<https://www.yomiuri.co.jp/local/hokkaido/feature/CO063096/20231002-OYTAT50080/>

3)総務省 市区町村の自治会等の加入率

https://www.soumu.go.jp/main_content/000816620.pdf